# 映画ジャンル論——ハリウッド的快楽のスタイル

加藤　幹郎著

（平凡社・356ページ・2,600円）

かとう・みきろう　57年生まれ。京大助教授。著書に『鏡の迷路　映画分類学序説』ほか。

## 見事な細部への視線
## 映画の批評を理論化

評者・桜井　哲夫

キミ、キミ、そこのキミ、「ロケッティア」（一九九一年）という映画を見たことがあるかい。えっ、そんな二流の活劇映画なんか見たことがないって。ふーん、不幸なことだなあ。うん、むろん、ぼくは劇場で見ているさ。だけど（声が小さくなる）、この本のなかで、スワッシュバックラー（冒険活劇）映画と呼ばれるハリウッド映画のジャンルのなかで、どのような意味がある映画なのかってことまでは、さすがに考えたことはなかったな。

それにしても、著者の細部へのこだわりには、感心したね。ナチス・スパイの映画スター、シンクレアがあの剣豪スターのエロール・フリンをモデルとしていて、彼が最後に山腹に激突して不動産屋の広告板（ハリウッドランド）のランドの部分をこわすんだが、これが今やハリウッドのシンボルとなっている巨大看板だなどという映画の仕組みを説明されて、いやあ驚いた。レンタルビデオ屋に走って、「ロケッティア」を借りてもう一回詳細にみてしまったくらいだよ。

日本では、映画批評は、多くは印象批評であるか、または見た映画の本数や細かな知識のみにこだわってマニアックな解説にとどまることが多い。この国では学問として映画学は成立しておらず、国立の映画学校も研究所も存在しない。むろん大学にも映画学部はない。そうした批評不在の風土のなかで、著者は、真剣に映画をシステムとして、社会現象としてとらえ、それを理論化しようと努力している。

さて著者が十種類に分けて論じているジャンル映画とは、「スタジオシステム下で製作配給公開されたハリウッド映画」のことである。著者は、フィルム・ノワールとギャング映画は異なったジャンルのものであること、スクリューボール（変人）コメディーは、非政治性を特徴とするので、キャプラの「オペラハット」などの作品（人民喜劇）は、これに分類されるべきではないことなどをていねいに論じている。

私が個人的に教えられたのは、イーストウッドの「許されざる者」が銃規制を目的としたブレイディ法案への反対を組み込んだ映画であったということだった。銃規制（伝統倫理の改変）は、西部劇というジャンルの死を意味したからなのだ。（東京経済大教授）